九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

世相繚乱、決起反逆 ： 武田泰淳『風媒花』からみるインターナショナリズムのアポリア

林, 欣彤
九州大学大学院地球社会統合科学府 ： 博士後期課程研究生

https://doi.org/10.15017/4103505

出版情報：九大日文. 34, pp.31-50, 2019-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

世相繚乱、決起反逆

――武田泰淳『風媒花』からみる インターナショナリズムのアポリア――

林 欣彤（RIN Kintou）

一、問題の所在

雑誌『群像』の一九五二年一月号から一一月号まで、十一回にわたって連載された武田泰淳初の長編小説『風媒花』は、日米のサンフランシスコ講和条約、旧安保条約の締結直後、朝鮮戦争の進行といった国際的な歴史変動の直中で書き綴られていた。長編連載の二年後、彼は新評論社より刊行した『現代文学と創作方法』Ⅱのために「私の創作体験」と題されたエッセイを書き下ろし、『風媒花』と『異形の者』についての創作動機を総括した。当時の中国文学研究会の同士たちが熱中していた「政治的なもの」にいささか無関心な自分は「水に油のようなもの」であり、しかし文学者としての自分を探求するために「なにか文章ができる」と披露した。

さらに、『風媒花』の連載終了後の一九五二年一二月に、武田は講談社よりまとめられて発行された『風媒花』単行本のはさみ栞りのために執筆したエッセイ「『風媒花』の筆者として」のなかで、『風媒花』の趣旨を以下のように要約した。

> それから国際関係で、愛国心というのは結局われわれのエゴイズムであるかどうか、それは書いて考えた問題だけれども、それが解決されなければインターナショナリズムというものも解決されない。つまり民族独立とか、愛国心とかいうけれども、果してそれがインターナショナリズムにどういうふうに結びついていくか、もしそれをうまく解決しないと妙に利用される。(1)

武田は前述において、「日本と中国との関係はフランスとドイツ以上にむずかしい」とし、国家関係を表現するジャーナリストや学者の生活記録を辿ってみれば、農民なり、労働者なりとの関係を避けて語れないという。そのため、武田は『風媒花』を考案する際には、「個人の経験」より「各個人の関係」で表現し、「全体的な構成」をもって断片的に記録すること、「未来性」を獲得できることを本作のスタンスとした(2)。つまり、複数の登場人物と事件を取り入れた武田の意図は、分裂された断片的な個人体験が織り成す「未来性」にある。武田によると、「全体性を確立する」ために自身の感覚に頼った作家らの戦後は、自己不信の感覚から出発する。戦前と戦中に構築された規制は戦後において崩壊し、そこから単一の経験ではなく複数の経験が記録されていき、持続的に解消されていくのである。

それまで「民族独立」や「愛国心」といったロゴセントリズムのナショナリズムは時代錯誤となり、多極的な国際関係としての

インターナショナリズムをどう探求していくのかという課題を抱えた『風媒花』の物語表現から物語内容までは、武田がポスト戦後[3]へと赴く思想的構図のメタファーであると捉えられる。したがって、本稿では『風媒花』が活写した一九五〇年代初頭の日本における多方面の世相、あるいは政治環境や社会事件などが交錯して織り成した戦後日本の全景を、同時点の現実世界における国際情勢と引き合わせる。それによって、『風媒花』の作者が一九五〇年代初頭の時点で、激動の戦後日本社会の変容をどのように捉え、戦時日本思想界における日本中心の把捉をいかに超越していたかについて検討する。さらに、当時点の武田に内在したインターナショナリズムの視点、ときに自家撞着のほど時代へ反論を唱える姿勢を考察していきたい。

二、中国との断層とインテリの知見

『風媒花』は私小説の一人称語り、すなわち「私」という特権的なナレーターを採用せず、第三人称の傍観的叙述者の視点により物語を展開し、個々の登場人物に対する〈記録〉を一斉に進行させていく。それにより、ジャーナリストめいた報告者の視点で、数多の登場人物が客観的な筆致で描かれる。それらの人物をめぐる事件を濃密に網羅した物語全体の均衡性が保持される。冒頭部は、中国文化研究会という媒介をとおして、一九五〇年代初頭の日中関係に焦点を当て、物語における事件性、同時性、混雑性の幕を開く。

ときは「日本の文化人の大部分は、「支那」大陸とのあいだに架かった、腐蝕した古い木橋に、ペンキを塗り、杭を添えて、「日支親善」を実現できると錯覚していた」ころであり、「日本と中国との間には断崖がそびえ、深淵が横わっている。その涯と淵は、どんな器用な政治家でも、埋められないし、飛び越せもしない」時期である。「そこには新しい鉄の橋のための、必死の架設作業が必要だった」という状況のもと、主人公の中国文化研究会会員の峯を代表とする一連の登場人物は、両国親交と両国文化の変貌を目標に日中関係の「築岸工事」を努力しようとしたが、「彼等の力はあまりに弱かった」と自覚するになる。

日中両国間の断層が、従来の政治戦略によって修復困難である認識を、作者自身が小説発行直後に『読売新聞』紙上で詳述した。

> 中国問題は、廿年来、私の頭にひっかかっていた。この問題ははじめは中国の自然や芸術に対する淡いあこがれの形であらわれたが、中日戦争の開始と共に、夢魔のごとくこびりついて離れなくなった。日本の学者や政治家がこの問題に対決して悩み苦しむ姿もながめて来た。一兵士として大陸の戦場に出向いたりすれば、いくら考えの浅い私でも、この問題が外界の一時的な現象ではなくて、自己の内心にかかわりを持つ、底知れぬ深淵であることを感ぜずにはいられなかった。[4]

右の引用は、『風媒花』における「日本と中国との間」の「断崖」と「深淵」が武田の長年にわたる「中国問題」への関心と不可分であることを傍証する。武田が述べるように、「中国問題」は「自己の内心」に根付いた問題であり、「外界の一時的な現象」ではない。『風媒花』は、「日本と中国との間」の「断崖」と「深淵」の修復を文学の領域で試み、さらにその経緯を現実の世界に発信しようとする小説である。そしてこの「深淵」は、日中両国の間の断層であり、作者自身が凝視している戦争の「深淵」でもある。

同エッセイには、『風媒花』の叙述者についても、「もともとが私小説的な発想であり、個人の過去を語ればすむはずであるが、その個人を進行しつつある舞台に載せて見ると、とてつもなく多数の人物が客席と楽屋の闇の中で、照明の方へ出場しようと待ちうけているのがわかった」という記述もある。本来「私小説」の個人譚として解決されようとした物語は、「私」という中心的な視点では納まりきれない。「多数」の中心人物が必要となる物語の要請に応じて、三人称視点が採用された。それにより、多数の中心人物にまつわる雑多な事件を現実とほぼ同時期の一九五〇年代初頭という舞台で演じさせることができる。

さらに、蒋介石、汪精衛、袁世凱といった日中戦争における中国側権力者の表象が、登場人物の個人体験とあいまって再現されることで、従来の歴史人物の複雑性と対中認識の葛藤が瞭然となる。まず、主人公の峯が「広い電車路を、大股に歩いて行く」帰宅の道の電柱に「援蒋反共」のビラが貼られている光景を語る際に、語り手は、「気の強い男が生き残っている。彼等は、自己の主張に従わぬ者を、再び売国奴と罵るだろう」、「一体いつまで、強者の世界は続くと言うのか」と、蒋介石のファシズム政策を批判する。

一方、支那文学の権威者である教授が詩文を作り、「汪精衛政府の高官に贈った」行為について、峯は博士が「王道楽土」を主張し、「「王道」を鼓吹したのは、「覇道」に熱中する軍部を批判するためだったかも知れない」と指摘する。ほかにも、語り手は細谷源之助の体験談を語る際に、支那浪人が売国奴袁世凱の帝政復興を支持し、「袁世凱が自己の権力慾のためには、国土の一部を平気で売りわたす男だぐらいは、百も承知していたにちがいない」ことを猛烈に批判する。

蒋介石といえば、中国の抗日戦争と外交戦略において重要な役割を果たしたが、国民党の指導者として独裁的な総裁制度を導入し、ファシズムの強化という結末を招いた日中外交史上の重鎮である。つぎに現れた汪精衛は、日中戦争下の一九三九年に「新中央政権」という傀儡政権を立ち上げ、蒋が推し進めた戦略と孫文提唱のアジア独立連帯精神に反対する一方、日本が提出した急進的な「アジア主義」に賛同したがゆえに、「叛党売国」で糾弾された人物である[9]。また、中国清朝末期に帝政を一時的に復興し、自ら最高権力者である皇帝に即位した袁世凱という人物は、中国の国土における日本の権益を拡大する不平等条約である二十一か条の要求を画策したことなどで有名であった。この人物は権力好き、無節操、反革命者、媚外といった形象で日本側においても中国側

においても悪評一色の権力者であった[6]。

物語におけるナレーションと主要人物にかかわる語りは、蒋、汪、袁など、政治的な過失を犯した中国政治家を一律に批判する立場から捉え、従来の日中関係を全面否定する。語り手の政治的スタンスはむろん完全なる仮想ではなく、武田自身の中国政治家批判、「孫文、汪精衛、蒋介石など有名な人々も、全国民党史から観ればやはり一黒点であり、現代中国模様の一花紋にすぎない」[7]という論調を照らし出す。さらに、作者の武田は物語中のナレーションと登場人物の意思表明をとおして、日中戦争と外交を大きく左右した中国側政治家の「黒点」を庶民の口調で評価し、戦争中日本の軍部がそれらの人物の過誤を承知したうえで自国本位に利用し、〝王道楽土〟と〝五族協和〟をスローガンに帝国主義に急進した史実を暴露する。それによって、日中両国それぞれの政治錯誤で成り立ったグロテスクな日中関係を解体しようとするのである。

のみならず、『風媒花』には、日中戦争におけるもう一つの重大な問題である捕虜射殺問題に関するエピソードも見られる。

F町の捕虜収容所では、終戦直前、中国兵が大量に射殺されている。無意味なむごたらしい殺人。東方友好協会の出版物で、彼は最近、その悲しむべき事実を知ったばかりだ。聴衆はおそらく誰一人としてF町事件を知るまい。細谷桃代も銀ちゃんも知るまい。それは日本人の知りたくもない事実だ。戦時中の日本人の他民族に対して行ったさまざまな虐殺事件について、日本人はもう聴き飽きている。日本人の耳は、押しよせて来る糾弾の声に、すでにしびれ疲れた。（武田泰淳『風媒花』『武田泰淳全集第四巻』筑摩書房、一九七八年四月、一八五頁。）

F町の捕虜虐殺事件について、一般民衆はほぼ知らないし、知りたくもない事実である。ここは、日本人にとって「聴き飽きている」ほど知らされたが、これからも延々と続いていく戦時中の虐殺事件に対する非難は、現実における戦争責任追及の様相を彷彿させる。このF町捕虜虐殺事件は、一九三七年に起きた南京事件を容易に連想させることから、実在の事件をモデルとしたと推測できる。

日中戦争中の一九三七年一二月中旬、日本軍に完全包囲され、集団的に投降した大量な捕虜に対して、日本軍は戦時国際法を無視し組織的に虐殺を行った。この組織的、集団的な捕虜殺害事件は、南京事件を構成する主要な部分であり、事件中に顕われた日本軍の陸戦法規の違反や、人道の破棄などの痛みはその後問題視されるようになった[8]。しかし、南京事件に対する史的研究には、日本人の大衆にとって戦争犯罪や戦争責任などの問題は「外的なニュースにすぎず」、彼等は日常生活を変わることなく営み、中国での戦争行為をも忘却しつつあるという指摘があった。これは「庶民エゴイズム――自覚されざるニヒリズムとしての大衆ニヒリズム」と呼ばれた[9]。

峯が忘れかけていた「日本人対中国人の問題」への記憶は、F町捕虜虐殺事件によって再び鮮明に喚起される。インテリの峯と正反対に、多くの一般民衆がこの事件を知らない、あるいは知ろうとしない様相からみれば、一般民衆の戦争犯罪に対する盲目という庶民的エゴイズムが表象されているといえよう。ここから推察されるのは、戦後日本の一般大衆が捕虜虐殺事件などの戦争犯罪に対する理解の欠乏、国家事件に対する無関心といった民衆の戦争認識の問題である。峯という主人公に仮託して、戦後社会における普遍的な戦争認識のなかで、一知識人として戦争犯罪の問題を回避せず、悪戦苦闘していた作者の姿勢がうかがえる。

かくして、中国との断層問題は「深淵」のアレゴリーによって提起され、また蒋介石、汪精衛、袁世凱などの権力者による政治過誤の批判、ないし南京事件を仄めかす捕虜虐殺事件などで多層的に立体化される。以上を踏まると、『風媒花』における中国問題にまつわる叙述は「深淵」と「橋」のアレゴリーをめぐって展開され、登場人物を虚構と現実の境界に立たせ、物語内部の仮想事件から物語外部の歴史的現実へと外延的に拡散していく図式を有していると思われる。中国との断層をめぐる重層的な事件性のなかで、戦後インテリの知見が点在し、未来性を開示するという物語の構造が想定される。

三、米軍占領終結期における日本の変容

中国との関係以外、アメリカ連合軍の日本での占領が終結を迎えたころ、つまり朝鮮戦争勃発後の混乱期に起きた社会事件と経済形態も、『風媒花』の物語内容に投影されている。峯の妹が終戦直前に病死し、妹の夫も不慮の死に見舞われたことは、峯にとって「簡単明瞭な事実」でしかない。彼は身辺を取り巻くさまざまな死について、その真相を突き止めることに無力でいる。

> 彼は自分の掌では、撫ぜさする事も掘り起こす事もできないさまざまの「真相」に囲繞されている。帝銀事件の犯人平沢が真犯人であるか否か。国鉄総裁の死が自殺か他殺か。三鷹や松川の転覆事件の被告たちが、有罪であるか無罪であるか。それを彼は知らない。鉄のカーテン、竹のカーテン、ドルのカーテンの向側について、何一つ見聞することはできない。知らないで生きることに慣れてさえいる。（二三頁）

峯は親属の死亡に真相究明の無力感を抱くことは、一連の殺人事件をめぐる疑惑へと思考を誘う。ここで言及された帝銀事件[10]、三鷹事件[11]、松川事件[12]はむろん、いずれも現実世界の戦後日本社会に大きな波紋を投げかけ、民衆を畏怖させた典型的な大量殺人事件である。事件の犯人らが特定されたあとも、事件に対する懐疑の声は絶えず、果たして彼らが本当に犯人なのかが確定できない状況であった。こうした現状のもとで、『風

媒花』が「帝銀事件の犯人平沢が真犯人であるか否か。国鉄総裁の死が自殺か他殺か。三鷹や松川の転覆事件の被告たちが、有罪であるか無罪であるか。それを彼は知らない」といった疑問を投げかけたのも、日本民衆の普遍的な声の反映であった。

松川事件に対しては、占領軍の国鉄干渉が引き金となったという疑惑があり、そのほかの事件の背後にも占領軍の関与があったのかといった民間意見が挙げられた。これらの社会事件と峯の無頓着によって、米軍占領下における混迷錯乱の世態、事件の無解決、民衆の五里霧中といった社会問題が実写され、真実が「鉄のカーテン、竹のカーテン、ドルのカーテン」の向こう側に隠蔽されつつある日本の実相が浮き彫りにされる。

その三つの事件のなかでも、とりわけ帝銀事件をめぐって、峯は女性インテリ桃代、労働者の銀ちゃんなどに向かって滔々と自説を語る。この銀行員毒殺事件は峯の小説家としての好奇心を煽り、その「性格にからみついて離れない、或る啓示、或る予感」を目覚めさせる。事件の犯人に対して、峯は「人間はわかりにくい動物」であると評価し、その事件は普通の殺人事件とは異なり、「きわめて現代的な特徴」を具えた事件であると提示する。というのは、特定の目標人物に絞った犯行ではなく、無兆候かつ無差別に実行されたからである。さらに峯は現代的な殺人事件について、昔の「一対一の勝負」のような形態とは反対の、「青酸カリを水に溶かして、だまって飲ませる」、あるいは「科学兵器のボタンをコーヒーでも飲みながらギュッと押す」ような、無感覚さを特徴として提示する。

帝銀事件に多大な関心を寄せていた作者は発生後の一九四八年五月、雑誌『文芸時代』に「無感覚のボタン――帝銀事件について――」というエッセイを発表した。このエッセイのなかで、武田は「綿密な知慧」で起こされた「実に個性的な、独創的な、それ故また運命的な」犯罪として検討している。犯人が被害者に対しても殺人に対しても「非情であり、非人間的である」ことから、この事件はドストエフスキー『罪と罰』の主人公であるラスコルニコフの「一人でも堪えがたかった」殺人と比べると「無制限に拡大され、開放されている」事件であるという見解が示された。

「良識、デリカシー、もののあわれ、ヒューマニズム、人情、愛」などの原始的な人間性が示すように、人間の歴史はすなわち「この無感覚」に対抗する歴史である。しかし、近代化の進行とともに、「全世界の事件」は続々と発生する一方、「この種のうすきみわるい無感覚」が蔓延していく始末である[13]。近現代化が醸し出した「異常感覚」の事件はこれまで人間に築かれた人間性を転覆し、歯車が狂った「無感覚」な時代を生み出す。帝銀事件の現代性と響き合うこの評論は、旧来の感受性の喪失と、これから増幅され開放されていく「無感覚」の到来を予告するものである。それは武田が考察した一九五〇年代の日本社会が直面した現代化の革命と弊害を併せ持つポスト戦後的なジレンマといえよう。

米軍占領下のさまざまな社会事件に遡及して、提起するほか、作者は占領終結期、つまり一九五〇年代初頭の日本情勢をめぐ

る問題にも光を当てる。突如にして投石事件で家屋を破られ、犯人にも逃げられた峯が事件の犯人を「米ソ二大勢力のいずれかの信者によって投げられた物かも知れん」と疑うのに対し、蜜枝は「中華さんかも知れないよ」、桃代は「右翼じゃないかしら」と、未知の犯人に対する詮索はとどまるところを知らない。犯人の国籍について複数の可能性があることを念頭に、峯は「世界大地図を胸に描いた」。

そうそう日本という、恐ろしく人口充満した長細い列島。そこには宇宙線の胎内を物凄いスピードでグルグルと回転する、陽子や電子やニュートロンの如く、活力に満ちたさまざまな微粒子がピリピリと神経をとがらせているのだ。卍だ。まさに世界は燃えさかる卍である。ナチスの旗印？あれは逆まんじだ。ロシア、アメリカ、中国、日本、その各々が鍵の手がたに交わってガッシリ四つに組んだ、この四肢の筋肉をブルブルと震動させる大相撲こそ、まごうかたなき神の御手によってアダムの子供に投げあたえられた、秘蹟の卍である。……（一八二頁）

朝鮮戦争勃発後の日本は「恐ろしく人口充満した」列島であり、アメリカ人や中国人が混在し、さらに日本人も複数の政治運動の派閥に分かれた。「活力に満ちたさまざまな微粒子」という現代科学的な比喩によって日本における多元的な国際感覚が表現される。また、「卍」という記号によって「ロシア、アメリカ、中国、日本」が交互に影響しつつ、ともに世界全体を動揺させる新時代の「大相撲」という様相が示される。この「秘蹟の卍」に象られた新生の世界情勢には、政治舞台から遠のいた「斜陽族」のイギリスと、「化粧品と芸術」を象徴としたフランスなど複数の国家像によって形成された多極的で運動的な構図が存在する。

一九六四年一一月に発表した「日本人の国際感覚」というエッセイのなかで、世間は「諸行無常」であり、「永久不変」は不可能であると説いた武田は、「いかなる社会主義国や資本主義国の最高指導者も、失脚したり、変死したりすることがあっても、いささかも不思議ではない」、「どこの国に原子爆弾を投下するか、それは予測できません」、「スターリンに対する評価は、たちまち変化した」[14]と、戦後の国際感覚の変容と世界情勢の目まぐるしい変化を評価する。戦争の敗北と米軍の占領を体験した日本は、戦時の閉鎖を終えて、世界情勢の予測不可能な開かれた未来を迎えた。

国際情勢の趨勢を言明しながら、『風媒花』は一九五〇年代初頭に、米軍の占領終結とともに幕を開いた朝鮮戦争勃発後の日本の社会表象を再現する。日本に築かれた朝鮮戦争向けのPD工場は、外見では「煙突も見せないほど高々とそそり立つ、厚みのある灰色の塀」で隔てられ、内部では「日夜、朝鮮向けの軍需物資が生産されつつある」戦争期特有の産物であり、「朝鮮半島で使われる、人殺しの武器の注文」を大量に受けている。PD工場のなかで、「日本の労働者が、安い給料もらって、

せっせと造り出す」武器を用いて、米軍が「毎日のように、バタバタ殺」すことが日常茶飯事となる。一方、そのときの在日朝鮮人たちは日本列島で職を得ることが困難であり、故郷の朝鮮半島に帰っても、「そこには別の恐怖が待ちかまえているにちがいなかった」。すでに「優秀な武器弾薬」が「腕のいい潔癖な職人」によって無限に生産されていく現状である。このような「戦争道具」が無感覚に手際よく製造されることには、「センチメンタルになる必要」がないし、善意も悪魔性もない。

こうした安易で不合理な社会現状に異論を唱え反発しようとした混血青年三村は、あえて「ストライキなんて、旧式きわまる手ぬるい方法」を採らずに、人間の「恐怖心という弱み」に「つけこまなくちゃいけない」と思い、ＰＤ工場の食堂に少量の毒薬を盛り、職員の手も借りて、複数のＰＤ工場で毒薬事件を実行する。

実際のところ、敗戦以降から日本に駐在した連合最高司令官総司令部ＧＨＱや、各種の在日外国関連機構は、朝鮮戦争の進行をきっかけにさらに増進し、日本を介して朝鮮方面の有事に備えるようにした。朝鮮戦争勃発から三年間、米軍などの連邦軍の調達要求書（ＰＤ）に応じ、求められたいかなるものを何でも調達・提供し、その戦闘力の維持に貢献した。一九五〇年から一九五三年までの朝鮮戦争のあいだ、野戦食糧、部品、燃料などの基礎軍備から石炭、木材、セメントなどの化工材料、または砲弾、砲弾をふくめた軍用器械まで、さまざまな調達を協力した[15]。

日本の特需産業という強大な助力がなければ、米軍の順調な戦争進行はできなかったと言っても過言ではない。朝鮮戦争中、日本はアメリカとの安全保障条約のもとで、米国と友好な国家として脱皮した。一部の社会主義・共産主義信奉者、つまりコミュニストの政治的動きがあったが、朝鮮戦争を遂行する国連軍に対しては協力的であり、同時に始められた日本の再軍備に対する世間の反対も少なかった[16]。このような社会情勢のもとで描かれた工場の情景は、むろん朝鮮戦争進行中の日本の特需経済を映射するものであるが、実際には起きていない混血青年による工場毒殺事件の挿入、さらに作中における「戦争道具」生産の積極性、および「センチメンタル」の欠如などの問題をめぐる批判的な叙述から、軍需経済という戦争協力に反抗する姿勢が窺知できる。

『風媒花』は、米軍占領の終結と朝鮮戦争の進行を歴史的文脈とし、犯人が未知の大量殺人事件、ＰＤ工場で製造されつつある殺人兵器、現状に反抗するために行われた毒殺事件を描く。朝鮮戦争の時代は、特需景気により高度経済成長をもたらし、ポスト戦後の発端となった。また、敗戦のニヒリズムから復興に向けた国家再建の時代として、新たな可能性が秘められた。その一方、伝統的な感受性の喪失という一面もあり、機械化や無感覚化の危機などが問題となった時代でもある。この現実と虚構が入り混じった物語の世界で、ポスト戦後に顕われた極端なアンセンチメンタルが暴露され、戦争協力への批判と日本のゆくえを懸念するヒューマニズムが内包される。

四、文化的越境の現代性

一九五〇年代初頭の政治面、経済面、社会面の事件のほか、『風媒花』はさらに文化面の「翻訳」という問題に注目を促す。しかし、ここでの「翻訳」という概念は言語学の領域に限られた概念ではなく、前述した国家間の「深淵」を橋渡す、多極的な国家関係を左右する文化手段のメタファーとして機能するものである。

峯の知り合いに、鎌原博士という「仁の研究」に一生を捧げた温厚な漢学者がいる。彼が信じた「仁」の漢学思想は戦争中に日本の大陸政策や政治上の妥協に利用され、彼を精神的に破滅させる。鎌原博士死後の終戦直後の上海や、中共治下の北京で、「八路軍」、「医師バツウン」、「抗日自衛隊」、「霞村にいた頃」などの翻訳書の原書が大量に出版され、「性能の高い武器のように」日本に輸入される。中国文学の翻訳に対して、インテリ桃代は「創作にくらべて、翻訳なんて、つまらぬ物じゃないかしら。結局、他人のふんどしで相撲とってるみたいでしょ」と、その劣等性を摘発する。峯も「こういう翻訳より俺のエロ小説の方がよく読まれる」と、その価値を疑う。

以上のエピソードが語るのは、文化の受容が政治に利用される場合に生じた齟齬である。中国で生まれ、東洋のヒューマニズムであった「仁」の思想は、日本に伝入されると、戦争加害のプロパガンダに利用される。一方、日本の敗北後、中国で量産された抗日文学は、日本人の読者に拒否される。こういった政治目的の文化受容は中国と日本の断層をさらに拡大するばかりである。

敗戦直後、上海居留民のなかには、支那通が多く、中国事情を紹介する者や翻訳者が続出する。たとえ「抗日自衛隊を殺した男が訳した」としても、「抗日文学は抗日文学」であると語る峯は、「中国語を日本語に移し替えるだけで、彼は別人になったかの如き外観を呈する」と、翻訳者の独創性を疑う。

> 彼が金銭のために訳そうが、善人たる自己満足のために訳そうが、政治的野心のために訳そうが、翻訳はそれ自体、独立した働きをするしな。……な、翻訳という奴には、こんな驚くべき重宝な性格があるんだ。魯迅的文学者になるのは到底不可能でも、魯迅を訳すには、語学的良心と文学上の常識さえあれば、いちおうの仕事はできる。おまけに、新中国と日本をつなぐ手っ取り早い方法と言えば、翻訳なんだからな。これは全く恐ろしいような、奇妙な現象だろ。
> （一四五頁）

右の引用を含む叙述は、翻訳者と翻訳の間に存在する二項対立の関係と、翻訳行為そのものに内在する二面性に重点を置く。翻訳において、言語を変更するだけで他者の思想を表現できるがゆえに、翻訳者自身の意識は存在しない。そのため、たとえ翻訳主体が「金銭」、「自己満足」、「政治的野心」といった外部の

欲望に囚われても、翻訳行為とその結果にはかかわらない。その自立性が、翻訳者の立場、態度、目的と無関係であればこそ、「翻訳」が可能となる。つまり、両者の相対化によって、翻訳主体の喪失と翻訳行為の成立は同時に実現されるのである。

翻訳者の主体性が強調された現代の翻訳理論からすれば、偏狭なアナクロニズムにみえるかもしれない。しかし、すでに隔てられた両国をつなぐ荒療治として、このような見解が示されたと考えられる。魯迅になれなくとも、魯迅を訳すことは多くの知識人にできるとすれば、「翻訳」は中国と日本の国家関係を結ぶ効率的な方法となれる。しかし一方、翻訳者はただの「外国の権力なり文化なりの代弁者」であり、「権力の片隅にまぎれ込む」恐れもある。とするならば、「翻訳」という存在は国家関係を取り繕う可能性と、権力者の道具に成り果てる危険性という、対立的な二面を併有するといえる。

武田はその後の一九六六年九月に岩波書店より刊行された『魯迅選集』のために評論を書き、魯迅を「苦悩者、抵抗者、破壊者、批判者、指導者、保護者、建設者」と評した。「世界文学の変貌と魯迅精神の関係」について、「中国と日本の文化に彼の存在が、どんな深い影響をあたえているかという、身近な反省さえ、充分にはなされていないのである」[17]と認めた。つまり、多重な意義を有した魯迅は日中文化の掛け橋であり、両国の文化交流、国家関係、ないし世界文学の変貌にもつながる存在と見なされる。『風媒花』における文化受容から推察できるのは、権力者の政治目的に翻訳されたものとは対照的に、魯迅作品の受容は、「新中国と日本をつなぐ」文化の方法たりうるという主張にほかならない。

さらに、『風媒花』に登場する中国文化研究会の会員で、理想主義者の軍地は、文学者の戦争協力、戦争期間中の漢学の悪用、および学問官僚主義が日本文化を冒涜したことについて批判を下す。軍地は大東亜文学大会の組織者、協力者、迎合者、迎合志向者を対象に、彼らが戦争宣伝のために文学を悪用したことを弾劾し、戦争協力にかかわった文学者たちが国民に対する戦争責任を徹底追究する。具体的にみれば、「封建日本の遺産児である漢学」が戦争全期間中に「奴隷性を発揮し」、「国民から学問を奪った」責任、「悪徳翻訳業者、悪徳出版社、職業的支那語教育業者」の「害毒の程度に応じた責任」、さらに「学問の官僚主義」責任である。

しかし、語り手は、軍地の文学者戦争協力論に「畜生め」、漢学批判に恩師の「恩知らず」、出版業界批判に「ジャーナリズムからシャットアウトされ、ひぼしになる」、学問官僚主義批判に「誰が月謝と下宿代」を払ってあげ、誰が「御立派な論文を審査し、かつパスさせてくれたんだ」というように、軍地の過激的、理想的な文化論の論点に逐条ごとに反発する。こうして、軍地の理想的な見解を論破する語り手の姿勢と、両者の見地が食い違っていることはいかにも明瞭である。

軍地という登場人物について、作者の親友である竹内好が『風媒花』のために書いた評論において、「作中でやや重い比重をもつ軍地という人物は、自他ともに許すごとく、私がモデルに

なっている」と評述し、峯と軍地の「対立、緊張の関係を設定することで武田は私を批判している。その批判を通して武田が自分を弁解もしている」、竹内「をふくめてのモデルが卑小化されたり、グロテスクにされたりしている」[18]と解釈した。

『風媒花』が『群像』に刊行された頃に、竹内好を中心人物の一人として国民文学論という文化論争が繰り広げられ、『風媒花』連載時にも関連議論が同誌誌面に続々と掲載されていた。この点について、渡辺一民と村上克尚などによる先行研究も提示したことがある。『風媒花』連載時の『群像』の一九五二年八月号には、当年六月一二日に開かれた『国民文学の方向』という座談会の内容が記載された。そのなかで、竹内は「国民が形成されるのは近代以降なので、近代国家が封建制の中から自分を形成して来る、それによって単一な個人の国民的結合が可能になる」と主張し、国民には「歴史的な傳統」という「フォルクの形」があり、国民文学の成立は「歴史に遡って傳統が顕みられる」と力説した。日本の近代文学は「封建制からの脱却」と「近代主義と反近代主義」の未分化を基底に生み出されるべきであるという[9]。

竹内の国民文学をめぐる見地はおもに文学の近代性という地平から出発し、国民国家と歴史伝統の力学に導かれた結果であった。さらにいえば、国民文学の方向性はつねに近代国家における国民というものを前提に規定されるのであり、たとえ近代国家の市民意識が芽生えようが、外国文化の伝来があろうが、やはり近代以降はこの定式の範疇にあった。同時期の社会動乱と殺人事件が相続いた時代背景に書かれた『風媒花』は、一直線の近代化よりむしろ開かれた現代性を露顕させている。軍地に対する語り手の反発は、具体的な根拠を示して解決を図るものではない。そもそも明白な対立は作者の意図する所ではない。作中では、無闇に対立項が押し出されるよりも、複数の主体のゆくえと他者との共起が開示される。

『風媒花』における文化面の問題はそれにとどまらず、同時代のいくつかの外国文学を視野に取り入れて展開する。桃代がサルトルの『自由への道』とカミュの『異邦人』を面白く堪能するのに対して、峯は趙樹理の『李家荘の変遷』を好んでいる。とりわけ、峯は『李家荘』の主人公小毛の、村のボスと革命党の両方に諂う風見鶏のような性分を「どっちの時代にも、小毛はダメなんだよ」、「両方から軽蔑され、嫌われて、悲鳴をあげて生きてるんだな。徹底的な弱者だよ」と語る。そして、やがて「この男の醜態」が自分と重なり合って、自分が小毛になりきった夢を見る。

夢のなかで、峯がなりきった小毛は中国山西省の農民と抗日自衛隊員の両方から追い込まれ、「誰かが小毛にならなきゃならないんだ。世の中はそうできてるんだ」と、弱者である不満を吐きながら、村民の威勢を前に「何しろ俺は小毛なんだからなあ」と嫌がらせのため強気を装う。村民が日本軍と軍閥によって殺されたあと、小毛は自殺を図ろうとしたが、一人の美青年に撃ち殺されそうになる。この美青年はＰＤ工場の毒殺事件を計画した三田村である。

前述の国民文学論の座談会においても、中国文学は「内的な抵抗意識と革命とを同時にやる」という論見があり、そのうち趙樹理の文学について「現在そういう国民文学のタイプみたいに考えられる趙樹理の作品などはシナの文学のやり方そのものの中から生まれている」と評された。武田はその座談会の内容から示唆を受け、趙樹理の文学を『風媒花』に活用したと推測できる。同年一二月に掲載された武田の「文学の国際性」というエッセイによると、「魯迅の散文詩の深さを好む中年の日本人で、『李家荘の変遷』の単純さを好まない者もいる。趙樹理の明るい前進的な姿勢に共鳴しても、魯迅の『野草』の暗い複雑さが理解できない青年もいる」[20]。同じ文学作品が異国の人々に読まれると、国によって摂取と反応が異なるが、「文学は海や山や国境を越える」という越境的な受容と錯綜的な国際性が期待されるともいえる。

日本人の峯は抗日文学の趙樹理文学を摂取することで、文化的他者との同一化と解された主体の文化的越境を実現した。外部に定着された歴史的経緯、社会的偏見を、文学受容の手段を通して文化的他者に転位すれば、内部の主体的位置が再発見、再確立できるのである。こうして、物語という枠組みの延長線上たる現実世界において越境的な文化読解が行われていく。文化受容の手段である翻訳が過去の歴史的因縁において悪用された事実は判明したが、現代の国際関係を再構想する突破点もそこにあることは否定できない事実である。国民文学をめぐる論争において、敗戦以前の日本を統べる近代視点の牽引力はすでに取り残されたアナクロニズムとして扱われねばならない。『風媒花』は日本／中国の二元的な対置関係を超越し、両者の越境と和解を図りながら、文化のインターナショナリズムを突き止めようとする。

五、米国と中国の狭間のなかで

「日本軍部隊の優秀な、最も勇敢、最も良心的な下士官であった経験」を持つ中国文化研究会会員の梅村は、「忠実な中国研究者たらんとする彼の苦悩を深くする」戦争史実を吐露する。

> 中日戦争を忘れて、中国を論ずることは、彼等の何人にも許されていない。何万何十万の中国民衆の家庭を焼き払い、その親兄弟を殺戮したあの戦争を語る事は苦痛だ。唇が歪み、心臓がねじれるほどの苦痛だ。その黒々とした事実、それは彼等の全人生を蔽う。米英は、日本にとって打ち克ちがたい強者であった。科学によって武装し、富み栄え、アジアを支配した、白人の先進国であった。米英と戦うことは、強者に挑んだ日本人の、せつない戦いの一種であった。米英に対して、日本は無鉄砲な挑戦者ではあったが、いやらしい侵略者ではなかった（侵略者であることすら出来なかった）。だが同じ黄色の皮膚をした隣国人に対しては、日本は徹底的な強者、侵略者、支配者として振舞おうとした。（一一四頁）

ここでは、兵士として戦争を体験した梅村の言葉を通して、日中戦争における日本の暴行と、米英侵略下の日本の無力を俎上にのせることで、二つの国家関係に挟まれた日本の位置が相対化されている。梅村をはじめとする元日本軍兵士にとって、日中戦争中の侵略行為は残酷で苦痛な事実に反して、米英侵略は彼らの圧倒的な無力、落伍の証明であった。こうした日本は〈強者／弱者〉、〈侵略者／非侵略者〉、〈支配者／被支配者〉といった、二項対立的な関係の狭間に置かれてしまう。一方、峯は毒殺事件の元凶を知らないまま、中国文化研究会の講演で現代の殺人事件について、「毒薬にしろ、原子爆弾にしろ、いざ使うときとなれば、実は簡単に人を殺せる」、そのあまりにも安易な悪意で「一体誰の意志で何の理由で殺されるのかわからない」という現代社会における人間性失墜の事実を指摘する。それでによって、「加害者が実は被害者、被害者が実は加害者という実例」が示した加害・被害の重層構造が暴露される。

三田村は自分の場合、彼の「体内」、「血液の流れの中で、橋はとっくの昔に」架かったにもかかわらず、日中の間の掛け橋について悲観視する。三田村は峯と軍地に対して、一九世紀から二〇世紀にかけて、日本と中国が加害者と被害者の関係に置かれたことを主張し、彼らを「被害者に同情し、被害者の立場に立とうとする加害者という、滑稽な役割」を受け持つピエロと見なす。また、日中関係を展望した中国文化研究会会員を「矛盾だらけ、矛盾そのもの、その矛盾でやっとあなたがたは文化人としての誇りを保っていられる」と揶揄する。

中国文化研究会の同士であると自称した彼は、「中国人に対して加害者になろうとは思いません」、しかし「日本人に対して加害者になってやろう」と考え、やがて「恐怖と戦慄を手段にして、融合と化合」を図る。日中混血であった三田村からすれば、中国文化研究会会員は彼自身と同じ加害者と被害者のあいだで揺らぐ存在であり、自らのアイデンティティーの分裂を深刻に再現する文化団体である。しかし、混血の三田村に内在する生まれつきの「橋」は日中関係を結ぶに至らず、むしろ内的な齟齬として時代の無感覚に激化され、毒をもって毒を制すような、破れかぶれ、自暴自棄の反撃に成り果てる。こうして歴史と時代が生み出した不合理が昇天させられることで、インターナショナリズムの問題は無解決のまま残存している。

ここで示された日本の被害者と加害者の二重構造については、多くの研究がなされ、過去から未来へ向かうための課題として議論されてきた。例えば、岩松繁俊によれば、日本の加害史実は、軍国主義、帝国主義によって中国に対する犯行、朝鮮への植民政策を行ったことにあり、日本の被害史実は、世界中唯一の被爆国として、広島と長崎が原爆によって攻撃されたことに体現した。岩松は、「核の「被害者」であったわれわれは、同時に、すでに対外的ならびに対内的に各種の加害者であった」と、日本の被害と加害の重層性を結論づけている[21]。この問題について、史実と向き合い、被害・加害の二元論を越えるべきであるという意見もある。小熊英二は、「一〇〇％の被害者や

一〇〇％の加害者はめったにない」、戦争問題を「善悪とか被害・加害とかの二元論」で裁断することはできないし、歴史と現実の複雑さを直視せずに、「議論の前進も、国際的な対話もあり得ない」という見解を示す[22]。

『風媒花』のなかで、兵士としての戦争体験を持つ人々の未来については、「愛国者としての名誉の死か、売国奴としての醜い生存か、エゴイズムの完成か、ヒューマニズムの妥協か、代か紅か緑か茫漠たる無色か、まだ誰も見きわめてはいない」が語られたように、その方向性は未だ五里霧中であった。中国文化研究会の会員らが日本の未来を語りだしたところで、会員の日野原は軍地や峯などの中国認識を批判する。

> 問題はそれで今後どの位、日本に利益があり、日本人が発展できるかと言うことだよ。宣伝するなら、それだけの論拠、データ、証拠を示してもらいたいもんだよ。吉田茂はその点で、現実的な政治家だな。だがおそらく彼は台湾の蒋政権と手を握るだろう。そうすりゃ少なくとも、アメさんとの仲はうまく行くからな。アメさんと掌を握っている間に、いそいで日本工業を復興する。それが彼の本心だろ。つまり吉田は、君たちのように空想的にではなく、現実的に日本を愛していると思うな。（一二六頁）

日野原は峯と軍地たちの空想的な中国ロマンを論破し、「日本に利益があり、日本人が発展できる」といった現実的な日本本位の傾向性を示す。そのために例示されたのは内閣総理大臣としてサンフランシスコ講和条約と日米安保条約を締結した吉田茂である。吉田外交の現実性については、「吉田が理想主義者ではなかったことはいうまでもない」という井上寿一の評価が一般的に受け入れられているだろう。

敗戦直後にアメリカ主導の憲法改正に吉田は侵略戦争の放棄という項目を盛り込んだ。朝鮮戦争が拡大するに従って、吉田は「単独講和」をやむを得ないものとし、日米のサンフランシスコ講和条約の調印を策励した。この点について、当時の国際環境においては、日本がアメリカに強力に代弁してもらうしか講和を有利に運べなかったと彼自身は回顧したている。そして、講和会議の中国代表は北京か台湾かについて、吉田は北京政府を否認する立場を回避したいにもかかわらず、アメリカの顔色を伺って台湾を選択した[23]。以上からみれば、吉田外交における戦争放棄、講和締結、台湾選定などの外交手段は的確に親米路線を歩んだが、いずれもやむを得ず日本の現実に立脚した選択であった。

『風媒花』における日野原の中国ロマンの批判と日本本位をめぐる論議は、こうした時代背景のもとで展開されるものである。政治的史実と対比すると、峯や軍地の中国ロマンは理想主義の空想にすぎないだろう。中国文化研究会の中国ロマンと吉田茂の日本本位との比較において、理想と現実が対峙する構図が現前する。これに投射された一九五〇年代初頭における国際関係の限界が見受けられるのではないか。

物語の終盤で、中国文化研究会員のコミュニスト中井は原因不明の理由で警官の拳銃を暴発させ、K署に連行された。そこに送り主が特定できない手紙が届く。手紙の書き手は、「峯さんは一体、コミュニズムにどのような姿勢で対決していられるのですか。コミュニズムを絶対の真理と認めるか、それともつまらない一風潮と見なすのですか。それが明確でないかぎり、中国問題は、しょせん好事家のなぐさみであり、愚かなる善意の夢想にすぎないではないでしょうか」（二五三頁）と、峯を問いただす。

「旧式な、無目的な、きわめてあいまいな愛情」を行動の根拠とした中井事件は、当然のことながら破綻を招いてしまう。しかしコミュニスト中井は決して個別ではなく、三田村事件と帝銀をはじめとする社会事件と同様に、現実への反発と革命的な衝動を精神的基盤としている。その無謀な衝動の裏側には、時流の混濁に乗じて一揆を起こす民衆の普遍的な心理が作動していると考えられる。作品執筆時に開かれた埴谷雄高、高見順、福田恆存らを中心とした「コミュニズムとの対決」座談会が示すように、日中戦争や朝鮮戦争を背景とした日本の政治的分裂において、日本の知識人らが政治と文学の問題、文学の政治への抵抗といった問題[24]に立ち向かっていた。

武田が『風媒花』で峯のコミュニズムと対決する姿勢を問いながら、現実におけるコミュニズムの問題を再現しようとしたことは言うまでもない。その一方で、武田は自身と共産主義との関係を追憶したとき、「私は、こと政治に関しては「あきらめ派」にぞくしている。或いは「忘却派」と言ってもよい」と述べ、「そんな私は「マルクス主義と対決しなければ、現代の文学と言えないぞ」と迫られても、困ってしまうのだ。とにかく、共産主義について正面切って何か意見をのべたりするのが、苦手なのだ」[25]と述べた。コミュニズムとの対決を放棄する立場は堅持されたというべきだろう。

『風媒花』における時局認識は、単一な語り手によるナレーションでなく複数の登場人物による独白、対話で語られることで、互いに交錯しつつ厖大な世界観を呈示している。中国文化研究会という組織をめぐって、会員らがさまざまな立場から意見を交わすことで、一九五〇年代の日本が米国と中国の狭間で被害者・加害者を同時につとめている位相が明らかになる。さらに日本の未来を展望する限り、中国との友好を模索した会員らは非現実的であり、吉田茂の親米路線こそ現状にふさわしい。朝鮮戦争下のコミュニズムの問題が次第に浮上するなか、知識人とコミュニズムとの対決が喚起される。一方で、正しい回答にたどり着くこともできない。言うまでもなく、『風媒花』に底流したインターナショナリズムの構図は、当時の共産主義のスローガンではなく、いわば協調的な国際関係を指し示す。こうしてぶつかり合いつつ共存の道を探る時期において、作者はポスト戦後の日本のジレンマ、つまりインターナショナリズムのアポリアを小説に刻印した。作品における一九五〇年代初頭の時代背景がほぼ執筆時点の実世界とシンクロさせたまま、作者の時代認識と創作意図がうかがえよう。

六、むすびに

物語の最後は、事件の離散性および世相の混迷と虚無を象徴し、また題名と響き合う、風媒花の形態が描かれる。

死して甦った紙片の花々は、七月の蠅よりもおびただしく、風の勢いと風のたるみに乗って、舞い昇り舞い移った。それは一枚一片では、枯葉よりも枯れ果てた、植物のカスであった。だが庭一面に次から次へと飛び立つとき、それは常緑樹木の花粉より生き生きと風に運ばれて行った。灰色の造花は、青春の生花の気まぐれや傲りもなく、そっけなく空中に浮かんでは、次に来る仲間に場所を譲りわたした。生き残りの苦渋が、灰の花の、つかのまの生命の根源をなしているのかも知れない。(二七〇頁)

物語に配置された離散的な事件は、この物語終末に顕われた風媒花の形態に回収される。これまで分析した内容上の意味はもちろん、物語表現いわゆる文体面の特徴もそこに含まれるだろう。『風媒花』の同時代評において三島由紀夫は「人物が多いわりに場割は少ない」という点に気づき、「多くの人物を、それぞれの場面に異なった組合せで登場させてゐる点、全事件が短日のうちに継起する点」からみれば、「さういふ点でこの小説は戯曲的であるが、場面の配列にさほど演劇的な積み重ねがあるわけではなく、場面々々がむしろ並列してゐる点では、絵巻物風でもあり」、「綴織(タペストリー)」を思はせもするのである」[26]と解説した。

三島の譬喩である「綴織(タペストリー)」と照応的に、風媒花の形態は物語全体のメカニズムを表現している。それを具体的にみれば、「紙片の花々」が舞い回るように自由に展開された複数の事件、「一枚一片」の枯葉のような離散的な配分、そして「植物のカス」のようにすべての事件が虚無と無解決として終わりを迎えることである。さらに、「次から次へと飛び立つ」花粉のように各々の事件が持続的に進行しつつ、「次に来る仲間に場所を譲りわたした」ように延々と交替してゆく。それらは「生命の根源をなしているのかも知れない」という一言が示すように未知の可能性を秘めている。すなわち、この「風媒花」は題名として、物語世界の内容と文体の両方のプロパティーを示唆するメタ・サインといえる。

作者の武田は『風媒花』発表後の評論において、サルトルの『自由への道』とドストエフスキーの『悪霊』を参考にしたことを解説した。両作はともに革命運動をめぐる物語であり、複数の登場人物の言論と行動が絡む時代劇でもある。『風媒花』の創作に取り掛かった際に受けた影響について、武田は以下のように説明する。

あの場合はサルトルの『自由への道』のだいぶ影響を受けていて、しかもフランス語の『自由への道』ではなく、翻

訳の『自由への道』の影響を受けているのだが、あれは三日間のことを長編にしようと思ったわけではないが、三日間書いてしまったら精も根も尽き果てて終ってしまったというわけである。[27]

一九五〇年代初頭の日本語訳版『自由への道』は第一部「分別ざかり」、第二部「猶予」、第三部「魂の中の死」という構成である。『自由への道』を全体的にみれば、第一部「分別ざかり」は一九三八年六月の四八時間内の出来事を描くのに対し、第二部は同年九月の一週間ばかりの出来事を書いている。『自由への道』の舞台はおもに、一九四〇年代初頭ごろ、つまり第二次世界大戦の勃発前である。フランスまたはヨーロッパ全土において、知識人、庶民、コミュニストをはじめとする社会の各階層が遭遇したナチスの脅威、国内の動乱と外敵の侵略などの問題と、それに応ずる人々の生き方を内容とする。

訳者はこんな僅かな時間内に登場人物の個々の動きが同時的に記録された「濃密さ」が「二十世紀の小説のなかでも他に類をもとめることは困難であろう」と評し、登場人物の身に起きたさまざまな事件を借りて、「自己の思想を語ろうとしたのであり、文体の濃密さはそのまま作者の思想的濃密さにつながるのであろう」し、「個々の出来事は、読者に興味を与える風俗描写にとどまらず、それは作者の思想と密着しているものであり、作者はわざわざそれらの事件をえらんだといえるのである」[28]と指摘する。

それと対照的に、『風媒花』の物語に散在する時局批判から武田の重厚な時代認識がうかがえる。つまり、サルトルを模倣して事件と思想の「濃密さ」を特徴とする文体を実現したことが裏付けられる。さらに、『自由への道』翻訳版を模倣したことは、『自由への道』と同じように個々の登場人物の身に起きた僅か何日間の出来事を同時進行させ、「三日間のことを長編」にしたことにも読み取れる。同時性のほかに、『風媒花』が『自由への道』の文体を模倣したもう一つの顕著な特徴は、心理描写が言動描写にすり替えられているという点である。『自由への道』の訳者解説によると、「小説の中には「特権的な観察者のいる場所はない」がゆえに、「あらゆる作中人物を見透すということは小説を自ら破壊する」ことに至り、「この長編のどこをとっても心理描写というものはまったく行われず」に語られている。『風媒花』も同様に心理描写が欠如しているにもかかわらず、登場人物の時局に対する論駁が多く語られることも、『自由への道』の文体の影響を受けたからにほかならない。

一方、武田は「「風媒花」の筆者として」のなかで、「もちろんドストエフスキーの「悪霊」は念頭にあった。だが彼が深すぎるので、想起するのが怕かった。彼の所有していた哲学性と大衆性の、ほんの片鱗でも獲たいと私は願った」と述懐し、ドストエフスキーへの接近を試みたことを自認する。

『悪霊』訳者の一人である亀山郁夫によると、『自由への道』と同様に革命運動を題材とした『悪霊』は、「「革命」批判」と「愛の不可能性」をめぐり、「人間ひとりひとりの個性や運命」

に重点を置く。登場人物のすべてが「革命という悪魔的観念のとりこになって破滅するわけではない」、悪霊とは「人間の業そのもの」[29]である。それに対して、『風媒花』も革命運動にかかわる中国文化研究会会員のひとりひとりの個人や運命に主眼を置き、社会の混乱に紛れ込んだ毒殺事件や拳銃爆発事件などの犯行をクローズアップする。ただし武田は、革命自体への注目よりも、その背後にある中国、米国、朝鮮などの国家に介在した日本の方向性、国際関係の可能性を主題とした。

『自由への道』や『悪霊』と類似的に、『風媒花』もインテリ、庶民、コミュニストなどの革命者を主要な登場人物として、朝鮮戦争という歴史的文脈を背景に、国外に起きた戦争が日本国内に及ぼす影響、社会の各階層がそれらの状況に応ずる言動をとおして、とくに中国文化会会員を中心としたインテリたちが国際情勢に対して反駁する。現実に実際におきた、または物語に虚構された種々相々の政治事件、社会事件が入り組んでいる。

むろん、実世界のさまざまな出来事と武田の知人である中国文学会会員の形象を小説に還元したわけではなく、誇張、変形、再創造の試みをとおして、物語化されたリアリティと作者の思考を投影している。史実仮構化の過程における〈記録〉から〈叙述〉、受容から創造へのエクリチュールの自在な切り替えは『風媒花』の根本的な方法である。一九五〇年代の日本は、近代以来本国を中心としてきた精神構造が敗戦とともに崩壊し、また敗戦直後のニヒリズムを克服することに成功したが、国家再建の錯雑と多極的な国際関係の難航というポスト戦後の課題が課せられた。それこそが、武田が一九五〇年代初頭に体験したインターナショナリズムのアポリアである。

※『風媒花』の本文は初刊本を底本とする『武田泰淳全集　第四巻』（筑摩書房、一九七八年四月）に拠る。

【注記】

1　武田泰淳「『風媒花』の筆者として」『武田泰淳全集第十二巻』筑摩書房、一九七九年一月、二五三頁。初出：『風媒花』、講談社、一九五二年十二月。

2　武田の原文は「私小説なら私小説は、個人の経験として断片的な未来性のないものとして終るかも知れないが、各個人の関係が全体的に構成をもって記録されて行くと未来性を持ちうるんじゃないか」である。

3　「ポスト戦後」については、吉見俊哉、山口二郎、原宏之らの研究がある。吉見俊哉によると、ポスト戦後（Post-Postwar）を語るには、まず「戦後」がいつ終わったかを考えねばならないが、その問いへの答えは単一ではないという。日本のポスト戦後とは、占領期の終了とともに終わった最初の「戦後」と相対的に、その後の高度経済成長からの時代「第二次の戦後」を指す。本稿はこの規準を参照し、『風媒花』が語る一九五〇年初頭、つまり米軍占領の終結期をポスト戦後の発端とする。吉見俊哉『ポスト戦後社会』岩波新書、二〇〇九年一月、i～iii頁。

4　武田泰淳「今年の仕事について　風媒花の深淵」『読売新聞』一九五二年、一二月二五日朝刊。

5　家近亮子「汪精衛による「新中央政権」樹立と蔣介石」、「蔣介石外交の新

たなる課題と日本」『蒋介石の外交戦略と日中戦争』岩波書店、二〇一二年一〇月、二二八～二三六頁、二七六～二七七頁を参照した。

6　岡本隆司『袁世凱――現代中国の出発』岩波新書、二〇一五年二月、i～vii頁を参照した。岡本隆司によると、袁世凱が中国を衰退、悪化の一途に追い込んだのは事実であるが、袁自身は保身のためのほか、中国の富強をも願っていた。また、分裂状態にあった清末の中国を集権・統一に向かわせたことからみれば、袁が果たしたことはゼロでなく、未だ褒貶さだまらぬ歴史人物といってよい。

7　武田泰淳「中国国民党史など」『武田泰淳全集第十八巻』筑摩書房、一九七九年七月、五一九～五二〇頁。初出：『新潮』一九四四年三月。

8　藤原彰「南京攻略の展開」洞富雄・藤原彰・本多勝一編『南京大虐殺の研究』晩聲社、一九九二年五月、六五頁～七〇頁を参照した。

9　津田道夫『南京大虐殺と日本人の精神構造』社会評論社、一九九五年六月、二〇〇頁。

10　敗戦から三年目の一九四八年の一月に、東京都内の帝国銀行（現三井住友銀行）椎名町支店で、銀行員を含む一六人が青酸性の毒物を飲まされ大金が奪われた帝銀事件は、日本にとっての未曾有の悲劇として、戦後の混乱期を象徴する事件となった。この事件の犯人として逮捕された日本画の大家である平沢貞通は、否認をつづけたものの死刑判決を下され、無実を支持する世論のため、死刑執行されないまま獄死した。浜田寿美男『もうひとつの「帝銀事件」二十回目の再審請求「鑑定書」』講談社、二〇一六年五月、九～一〇頁を参照した。

11　その二年半後の一九四九年七月に、東京西郊の多摩郡三鷹町（現三鷹市）で空前の無人電車暴走事故が起こり、乗客の六人が即死、二〇人が重軽傷を負った。犯人として逮捕されたのは元運転士の竹内景助と共産党員の九人であり、最終的に竹内の単独犯行として死刑判決が下されたが、民間と彼自身から無実の訴えがなされ、無実の新証拠も提出された。片島紀男『三鷹事件――１９４９年夏に何が起きたのか』ＮＨＫ出版、一九九九年六月、九、四六六頁などを参照した。

12　三鷹事件発生後、全国各地で奇怪な鉄道事故が頻発し、松川事件もそのうちのひとつであった。一九四九年八月、東北本線青森発上野行旅客列車が福島駅をすぎ松川駅に接近したとき、突然機関車が脱線転覆し、乗務員三名が轢かれて死亡した。事故の原因は計画的な路線破壊とみられ、その背後には連合占領軍の命令による国鉄労働組合の大量首切りへの反対闘争と、国鉄総裁の死亡事件が起爆剤となったとされている。犯人として逮捕されたのは二〇名の国鉄組合員と東芝労組合員であったが、世間から信憑性を疑われ、のちに全員の無実が証明されという。松川事件対策委員会『世にも不思議な松川事件』一九五八年を参照した。

13　武田泰淳「無感覚なボタン――帝銀事件について――」『武田泰淳全集第十二巻』筑摩書房、一九七九年一月、一〇五～一一〇頁を参照した。初出：『文芸時代』、一九四八年五月。

14　武田泰淳「日本人の国際感覚」『産経新聞』、一九六四年一一月二日。

15　この点について、一九五二年四月に初代の駐日アメリカ大使となったロバート・マーフィーは「朝鮮戦争が起こったのは、日本人にとってまるで、思いがけない幸いであった。というのは、お蔭で彼らはアメリカその他の国連軍が必要とした補給物資や役務を供給するために、彼らの粉々にこわれていた産業を最大速度で再建することができたからである」と述べ、それに日本人はこの機会を活用して「驚く速さで、彼らの四つの島

を一つの巨大な補給倉庫に変えてしまった」と、自著『軍人のなかの外交官』のなかで強調した。山崎静雄：『史実で語る朝鮮戦争協力の全容』、本の泉社、一九九八年十一月、二六～二七頁、六七～六九頁を参照した。

16 芦田茂：「朝鮮戦争と日本―日本の役割と日本への影響―」『戦史研究年報』(8)、二〇〇五年三月、一二一頁。

17 増田渉（ほか）編集（内容見本）、『魯迅選集』岩波書店、一九六六年。

18 竹内好「武田泰淳の『風媒花』について」『竹内好全集第十二巻』筑摩書房、一九八一年八月、一二二～一二三頁。初出：『群像』、一九五三年五月。

19 伊藤整、臼井吉見、折口信夫、竹内好「座談会　国民文学の方向」『群像』一九五二年八月号、一二三～一二四頁。

20 武田泰淳「文学の国際性　新しい日本文学の胎動」『朝日新聞』一九五二年一二月六日。

21 岩松繁俊『反核と戦争責任　「被害者」日本と「加害者」日本』三一書房、一九八二年八月を参照した。

22 小熊英二『私たちはいま　どこにいるのか』毎日新聞社、二〇一一年二月、五二～五六頁を参照した。

23 井上寿一「吉田茂――「親米」通商国家路線の形成者」増田弘編『戦後日本首相の外交思想　吉田茂から小泉純一郎まで』ミネルヴァ書房、二〇一六年九月、三四～四六頁を参照した。

24 埴谷雄高ら「座談会　コミュニズムとの対決」『群像』一九五一年八月、八～三〇頁。

25 武田泰淳「私と共産主義」『武田泰淳全集第十三巻』二一九頁。初出：『中央公論』一九五六年八月号増刊。

26 三島由紀夫「「風媒花」について」、『群像』一九五二年一二月、一四二頁。

27 武田泰淳「私の創作体験」、『武田泰淳全集第十二巻』筑摩書房、一九七九年一月、三八六頁。初出：『現代文学と創作方法』II、新評論社、一九五四年八月。

28 佐藤朔、白井浩司「訳者のことば」『自由への道　第一部（上）』人文書院、一九五〇年一〇月、二八〇頁。

29 亀山郁夫「訳者あとがき」『悪霊』光文社、二〇一一年一二月、六一五～六一七頁。

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程研究生）